

池田由子著 集団精神療法の理論と実際

1968年初版されたこの本は、今年すなわち1974年第2版が出版された。第2版は、初版に比較して、種々の点で加筆され一段と内容を充実し、深めてきている。先ず総論では集団精神療法の最近の動きやわが国における集団精神療法が紹介され、この領域の発展や今後の方向を読者に示してくれるし、各論ではその後著者が治療者、協同治療者又は観察者としての実践をふまえた貴重な記録が収録されている。

そもそも集団精神療法が近代医療の中に位置づけられ、体系的に理論化されたのは、わずか半世紀前のことである。以来本療法の適用は精神障害者を中心にすすめられ、それがそのまま集団精神療法の発達をもたらしたが、最近、精神障害者に限らず「問題をもつ子ども」や、心身障害者(児)を、「一般社会の外におかず、これらの人々を含んだ社会」の発展を誰もがねがうようになると、あらためてその人々に対する適応援助の必要性が痛感されるようになり、その有力な方法として集団精神療法がとりあげられるようになった。わが国でも公私の病院、学校、児童関係クリニック、社会復帰施設

等での実践がすでにある。しかし専門家たちも、いざ対象者に接し、同じ社会の構成員としての適応援助をはかるとなると、一体どうやればよいのか途方にくれることが多い。文献から理論的知識を得たとしても実践家は、なおその実践の中でちゅうちょし、他の実践に手がかりを求めて右往左往するのである。これは専門家に対する社会の急速な要請とその増大にも責任はあるが、何といっても学問的立場からの適応援助の歴史の浅さにも起因する。本書は実践家のためのすぐれた入門書であると同時に、専門家にも参考になる事が多い。すなわち著者は、本療法に関するおびただしい参考文献をていねいに紹介しているが、指導者によって内容、意見の異なるところは、実際に著者が指導者に接した上で、著者自身の解説が、加えられているので、読者にとっては著者に導かれるままに集団精神療法の理論と根拠を自分のものにすることができる。しかし何と言っても著者の日米の病院、施設等での実践記録は、本書の特徴をなしているといえる。豊富な事例が、文化的社会的背景の中で、しかも著者の立場から一貫した理論

づけがなされているので、治療に行きづまった際に何らかの解明を与えてくれることは間違いない。

内容として、総論で本療法の発達適応症、集団構成、治療の経過、治療機制、治療者、個人精神療法や森田療法との関係、施設管理等が、各論で精神科外来、精神病院、児童相談所、社会復帰施設における集団精神療法があげられている。最後に治療者の訓練についてもふれられており、まさに著者の長年の研究と実践なしにはできなかった本であると言える。我国における集団精神療法への関心は急速に高まってきているが、精神療法の土壌が浅い上体系的訓練なしに治療者が実践に放りこまれることさえある。このような治療者に、具体的現実的不安があるとすれば、これに対処できるアドバイスが本書には随所にある。初心者、経験者を問わずぜひ一読をおすすめしたい。

(東京都心身障害者福祉センター、
援護課長 金平 輝子)
(B6, 頁378, 図7, ¥6,800, ㊦200)
医学書院刊